きょうと生物多様性センター

ニュースレター

令和７年９月
３号

国の天然記念物「深泥池」

CONTENTS

きょうと生物多様性センター運営協議会　ごあいさつ　―２
保全現場からお届け！京都市内の団体にインタビュー！　―３
「きょうと☆いきものフェス！２０２５inうみほし」レポート！　―４
令和７年度上期活動トピックス　―５～

きょうと生物多様性センターへの期待と友の会へのお誘い

竹門　康弘

京都府に自然史博物館がないことは、私がまだ学生だった1980年代にも生物学者や自然愛好家の間で問題視されていました。近年では2017年に設立された自然環境保全京都府ネットワーク（以下ネットワーク）においても、機会あるごとに自然史博物館の必要性を訴えてきました。とくに、京都府内に現存する動植物標本については、その多くが個人や学校等の所有であるため、世代がかわれば失われてしまう懸念が高まっています。2023年に京都府と京都市の協働によって開設されたきょうと生物多様性センター（以下センター）では、施設としての博物館には手が届かないまでも、標本の所在を含めた生物多様性情報の収集と活用に向けた整理が始まっています。ネットワークは、各地で活動する自然保護団体の集まりであるため、核になる場や運営組織を欠いており、団体間の交流や情報交換も定期的・継続的にはできていないのが実状です。こうした背景の下、今年3月の総会において、きょうと生物多様センター友の会（以下友の会）の設立に向けて、ネットワークを「きょうと生物多様性センター友の会準備会」（以下準備会）へ移行することとなりました。現在、センターと準備会において審議されている友の会の規約や運用体制などが固まれば、正式に友の会を発足して新たな活動が始まる予定です。

ここでは、友の会発足に先立ち、改めてセンター並びに友の会に期待したいことを述べておくことにします。

第一の期待は保全対策についてです。ネットワークでは、個別の団体が対象地の自然環境の具体的な保全手法について団体間の意見交換をしてきました。地域ぐるみで実効性のある保全対策を実行するためには、行政や複数団体との連携が不可欠であり、センターや友の会が橋渡し的な役割を果たせることを期待いたします。

第二は、友の会の拠点となる部屋や情報のアクセス場を設置してほしいというものです。当初の目標は自然史博物館にそのような場を設けることでしたが、現状においてはセンターに期待するところです。

第三は、友の会に小・中・高・大学生の若い息吹を引き込んでいただきたいという点です。ネットワークの多くの団体は高齢化の途上にあり、若手の育成が課題となっています。友の会のメンバーから地域の環境保全を担う力が生まれることを期待しています。

そして最後に、京都府に存在しない自然史博物館をどのようにして補うかしっかり検討していただきたいと思います。友の会では、団体会員ベースから個人会員ベースに移行することで、年齢も含めて多種多様なメンバー構成になり、会員の興味も多様化すると思いますが、その中で自然史博物館設立に向けた機運が高まることを期待しています。

このニュースレターの読者の皆さまで、生き物の好きな方や自然の好きな方はもとより、これから好きになっても良いかもと思われた方は、近く発足予定の友の会の会員になっていただければ幸いです。

きょうと生物多様性センター運営協議会
正会員　竹門　康弘

東京都生まれ。京都大学でカゲロウの生態学研究で理学博士となる。京都大学防災研究所では、カゲロウや魚が棲める川づくりの研究に従事。趣味は釣り・山菜採り・珈琲焙煎。京の川の恵みを活かす会代表・深泥池水生生物研究会世話人・友の会準備会（旧 自然環境保全京都府ネットワーク)会長・大阪公立大学国際基幹教育機構客員研究員。

「京の川の恵みを活かす会」とは？

鴨川・桂川・宇治川・木津川を含む淀川流域の自然の恵みを豊かにし、これを活かしていくことに賛同する関係団体・個人で構成された連携組織（ネットワーク）です。大阪湾から鴨川まで遡上してくる天然アユをシンボルに、淀川流域に天然アユが生息できる豊かな水辺環境を取り戻すことを目指して、流域の漁協、大学等の研究者・専門家、NPOなどのメンバーが関連する行政と連携しながら活動に取り組んでいます。

4月に行われた今井堰における仮設魚道設置後の集合写真。木製魚道を手際よく設置します。今年も天然アユが魚道を利用し遡上する様子が確認できました。6ページ掲載の「担い手研修会」にもご協力いただきました！

保全現場からお届け！

深泥池を守る、京都市内の団体にインタビュー！

1927年に国の天然記念物に指定された「深泥池」を守る「深泥池水生生物研究会」に、当センターのコーディネーターがインタビューに伺いました！

深泥池水生生物研究会とは？

深泥池は、氷河期の生き残りと考えられる高層湿原を有し、その学術的価値から深泥池の生物群集全体が国の天然記念物に指定されています。ところが、1990年代の学術調査によって、外来魚が「深泥池生物群集」に重大な影響を与えている可能性が高いことがわかり、1998年に外来魚の調査・捕獲を目的として深泥池水生動物研究会が設立。その後、植生管理を行う深泥池水生植物研究会と併せて2001年から「深泥池水生生物研究会」と改称しました。

～回答いただいた方のご紹介～

深泥池水生生物研究会経理担当。増えすぎたジュンサイなどの植生管理と水質調査も担当している。

塩田貞子さん

京都大学大学院農学研究科修士2回生。深泥池水生生物研究会ではHP管理などの広報を担当。

大村麗奈さん

-入会したきっかけは？-

大村さん：４年前、散歩していた際に植生管理中の塩田さんに何をしているのか訊ねたことがきっかけです。聞くと塩田さんが水の中をザバッと掬い、「増えすぎたオオバナイトタヌキモを除去しているのよ」という話を聞かせてもらいました。そこから面白いなと思って翌週も、と通いだして、今は会の運営委員になり、友人もたくさん引き込んでいます。

©深泥池水生生物研究会

オオバナイトタヌキモ
Utricularia gibba
左写真の水面を覆っているマット状の植物。鑑賞用に持ち込まれた外来種で、在来種タヌキモと競合関係にある。

-1980年代の深泥池-

塩田さん：私の始まりは「深泥池を守る会」でした。1981年に大学に入学したのですが、当時はWWFジャパンの京都支部スタッフをしていました。1985年、道路拡幅のために深泥池の1/3を埋め立てる開発計画が出て、それに反対する市民運動が起こりました。行政が設置した京都市岩倉上賀茂線深泥池検討委員会では、専門家が開発計画の妥当性と環境アセスメントを定期的に議論していましたが、当時は保全よりも生活の利便性を優先するバブル経済隆盛期で、自然保護のために中止を望む市民や地域住民の民意は行政に届きにくい状況でした。WWFの同僚スタッフからの勧めもあり、私は開発に反対し保護活動を掲げる「深泥池を守る会」に入会しました。これは1970年代に深泥池の調査に関わっていた研究者たちが立ち上げた会で、天然記念物深泥池の保護を第一にしていました。

その後、様々な経験を経て、市民運動の話をする機会もいただく中、1998年に日本陸水学会百周年記念全国一斉水質調査が実施されることになり、この調査に参加したことが竹門先生（深泥池水生生物研究会代表・世話人）との出会いでした。このことをきっかけに深泥池水生生物研究会を知り、入会しました。

-深泥池の魅力とは-

大村さん：都市部にあるので週末に気軽に来られる、身近な自然ということです。また、当会の外来魚駆除活動を通して、投網、籠網（もんどり）、定置網（エリ網）、釣竿など魚釣りの技を学ぶこともできます。学生さんにとっては学外で学びを得る機会としても使えるフィールドですね。私は塾講師をしていますが、塾だけでは学べないことがここで学べます。ハナダカマガリモンハナアブを見て喜ぶ教え子の姿に、私も嬉しくなりました（笑）。

塩田さん：様々な人がいるので、将来のことを聞くこともできますよ。水産学部って何するの！？なんてこともね（笑）。

©深泥池水生生物研究会

ハナダカマガリモンハナアブ
Anasimyia lineata
京都府内では深泥池でのみ確認、絶滅危惧種（京都府RDB2015）。自然度の高い湿地に生息する。

春～秋までの毎週末、ブラックバスやブルーギルなどの外来魚の駆除活動を実施。駆除を通じて網の仕掛け方や投網の広げ方など、様々な技を学ぶ。

参加者全員で投網を持って記念撮影！

©深泥池水生生物研究会

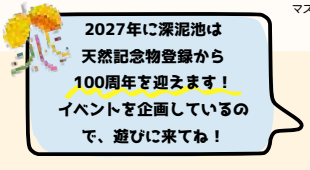
-自然を守るために-

塩田さん：自然保護活動は、世代や世論の風潮が変わるたびに繰り返されてきました。経済活動を優先して自然を開発したら元に戻るのに何年かかるのか、それを数値化して自然そのものの価値を見えるようにしないといけません。保護活動といっても自分だけではたかが知れているけれど、何かを守ろうというときは、自分の力を尽くさないといけないんです。深泥池水生生物研究会は大学生が関わることで10代の中高生もたくさん参加するようになりました。特に10代の子たちには、自然に対する感覚を養い、活動内容や見かけた生物の記録を残すクセをつけてほしいです。これは自然環境の変化に気づかないままに終わらないようにするためです。自然を大切にする気持ちを育て、地域への愛着を持ち続けてほしいですね。

（インタビュアー：まつむら）

深泥池への熱い想いを語るお二人

来年には新天地に引っ越すという大村さん。「学生は流れ者。けれど、これからも新しい人が入ってくるでしょう。」という言葉とともに、次世代の運営委員への思いを教えてくれました。



マスコットキャラクター
ミドロンパ

深泥池水生生物研究会の活動の様子を紹介！

活動日などの詳細は深泥池水生生物研究会のHPをご覧ください！ HPはこちら→

夏休みには毎年底生動物調査をします。市民参加型で、深泥池の水生生物の調査と同定を行います。小さな子どもも夢中でソーティング（仕分け作業）に挑戦！

外来生物駆除の日の様子。
この日は大きなウシガエルがとれました。網にかかったクサガメの大きさを計測しているところです。

ジュンサイ採りはボートで行います。"なべやん"こと田邉先生が、手漕ぎボートをスイスイと漕いでいきます！毎週、外来生物の駆除に取り組んでいます。

深泥池特産のジュンサイです。
刈り取ったジュンサイは可食部とそうでない部分を仕分けます。ぬるぬるのジュンサイを仕分ける作業はとても重労働です。

京都のいきもの・自然を知ろう！体験して楽しもう！

きょうと★いきものフェス！2025 in うみほし

オオミズナギドリ *Calonectris leucomwlas*
2025年はオオミズナギドリが「京都府の鳥」に制定されてから60周年！
本フェスではオオミズナギドリモチーフのステッカーを配布しました。

今年度、新たに京都府立丹後海と星の見える丘公園にて6月22日に「きょうと★いきものフェス！2025inうみほし」を開催しました。当日は、「アースデイ丹後」と同時開催し、800人を超える方々にお越しいただきました。園内の自然観察会では、ハッチョウトンボをはじめとする昆虫や植物の観察を行い、ブース展示では、いきものの標本や活動紹介のパネルがたくさん並び、京都府北部の自然を知り楽しむ1日となりました。

ブース展示

保全団体や学校等が、地域の生きものや活動について紹介を行いました。梅雨の時期となり天気が心配されましたが、当日は朝から日差しが強く、快晴の１日となりました。多くの方に来園いただき大にぎわい！標本展示にワークショップ、クイズなど様々な催しが開催されました。

屋外ブース展示の様子

京都府北部を中心に活動する団体様をはじめ、11団体がブース出展を、4団体がポスター出展をしてくださいました。

屋内ブース展示の様子

屋内ではポスター展示や、丹後・丹波虫の会による昆虫の展示に来園者も興味深々。ゲンゴロウやタガメが元気に泳いでいました。

総合案内の様子

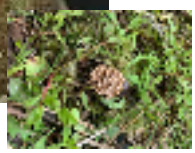
総合案内では同時開催のアースデイ丹後とともに皆さまをお出迎え。ウクレレ奏者のステキな生演奏とともに、スタッフもノリノリです！

自然観察会

保全団体が主催となり、２つの自然観察会が開催されました。１つは豊かなうみほし公園を使った「うみほし自然観察会」、もう１つはうみほし公園を飛び出て、上世屋の源流をめぐる「世屋川流域エコ＆ジオレンジャーへの誘い」です。

うみほし自然観察会

４団体が共同主催の観察会です。大きな補虫網を掲げて、みんな集まれ～！１時間強をかけてじっくりとうみほし公園を観察し、植物、昆虫、鳥、ヘビと、いろいろな出会いがありました！ビオトープではハッチョウトンボにも出会えましたよ！



世屋川流域エコ＆ジオレンジャーへの誘い

雄大な世屋川の源流へ向かう観察会です。世屋川流域エコ＆ジオミュージアムサービスの安田さんと、宮津天橋高校フィールド探究部の多々納先生の説明を聞いたあとは、車に乗って谷間に出発進行！水源を眺めたあとは美しい棚田を見て、山中の湿原をめぐりました。

京都府立 丹後海と星の見える丘公園（通称：うみほし公園）とは

「きょうと☆いきものフェス！2025inうみほし」の会場となったうみほし公園は、日本三景天橋立で有名な宮津市にある海と山に囲まれた自然豊かな公園で、園内には研修室やカフェ、宿泊施設、キャンプ場を備えています。施設名の通り、丘からは美しい宮津湾を、夜には満天の星を眺めることができます。また、広大な園内では様々な動植物が生息しており、5月～8月には日本一小さなトンボであるハッチョウトンボ（京都府登録天然記念物及び準絶滅危惧種（京都府レッドリスト2024））を見ることができます。

ハッチョウトンボ
Nannophya pygmaea

令和7年度上期 活動トピックス

収集

懐かしい存在になってしまった（！）
水辺の昆虫たちの情報を集めています！

― 消えた普通種の探究のために

きょうと生物多様性センターでは、タカラ・ハーモニストファンドの研究助成を受け、今年から2年間の予定で、調査研究を開始しています。テーマは、以前は身近だった生きものが希少生物となる状況と保全の手段を実証面から探ること、特にミズスマシに着目して進めています（みんなでさがすミズスマシ、ミズスマシはどこへ行ったのか？ 題してMMプロジェクト！）。

2025年8月現在、私たちが収集した昆虫類の記録は25目447科4,959種51,128件で、コウチュウ類が最も多く、全体の1/4を占めています（図１）。その中でミズスマシ科はわずか72件（1880年から2025年まで）。今回、私たちが最も情報を得たいと考えている止水性のミズスマシ（*Dineutus* 属と *Gyrinus* 属）となると32件です！

「1970年代にはどこの田んぼにもいた」とよく聞くのですが、あまりにも普通の存在であったためか、標本も記録もほぼ得られない状況です。現在、京都府内でミズスマシの生息が確実に確認されているのはたった１か所しかありません。昔生息していた場所や時代を多くの方へのインタビューを通してたどり、普通種が希少種・絶滅寸前種に変わった背景と理由を探り、今ある生息地の保全に役立てたいと考えています。もちろん、現在のミズスマシ情報も歓迎です。ぜひ、情報をお寄せください。

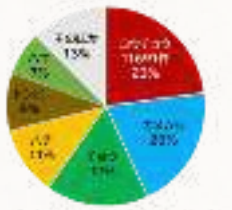


図1. 収集 51,128件の目別構成比率

京都府内でミズスマシを見たことがある、あるいは聞いたことがあるなど、
ささいな情報でも当センターまでお寄せください。
あわせて、学校の生物標本に関する情報も収集しています！

→

ミズスマシ
Gyrinus japonicus
コウチュウ目ミズスマシ科に属する水生昆虫の一種。
絶滅寸前種（京都府レッドリスト2024）。

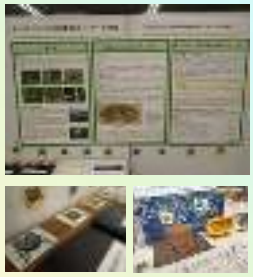
利活用

鳴く虫調査への協力

令和6年12月から、当センターは「鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワーク協議会」に参加しています。本協議会では、草地にくらす鳴く虫をテーマに、京都市内全域を対象として、市民参加型の調査「京の虫の音レコーディング2025ーみんなでつくろう！鳴く虫マップー」を実施中です。当センターは、取組の広報を担当し、交流オフィスでもパンフレットを配架しています。秋の夜長、耳を澄ませて、虫の音を聞いてみませんか？

「京の虫の音レコーディング」について、詳細はこちら！
令和7年10月31日まで投稿を受け付けています。
調査対象種：マツムシ・スズムシ・エンマコオロギ・キリギリス・クツワムシ

→



交流オフィスでの
公募展示第一弾です！
（令和7年10月23日まで公開）

利活用

森・里・街・川のつながりを結び、
京都のみらいを紡ぐ

令和6年度から、生きものの生息・生息地を保全・回復し、将来にわたり生物多様性の恵みを享受するため、「森・里・街・川」のエリアごとに生物多様性の保全活動の企画支援・コーディネートを拡充し、新たな活動の創出を促進しています。今年度は「森・里・街・川」のつながりをテーマに、各エリアをつなぐ体験を通して参加者や保全団体が生物多様性の流域の広がりについて考えるきっかけとなるよう事業を実施しています。

令和7年7月6日には「里」と「川」をつなぐ、「たんぼのいきものツアー」を開催しました。NPO法人亀岡人と自然のネットワーク理事の宇野洋平さんにはアユモドキの生態について、自然写真家の飯村茂樹さんには田んぼ周辺の自然環境についてご講演いただき、午後には(一社)亀岡オーガニックアクション様の田んぼにて、観察会を行いました。暑い中でも生きものが逞しく活動している様子を、子どもたちは熱心に観察しているようでした。また、オブザーバー参加された各保全団体の方々の意見交換も活発に行われました。

お米の花って見たことあるかな？すごく短い時間しか咲きませんと話す飯村さん。素敵な写真を見ながら、解説をいただきました。

アユモドキの生活環境を見せてもらい、宇野さんからたんぼのいきものの解説をしていただきました。

令和7年度上期 活動トピックス

継承

交流オフィスの活用

昆虫博士と標本を作ってみよう！！

～夏休みの自由研究もこれでカンペキ！～

8月1日、8日に交流オフィスにて、昆虫標本作成イベントを実施しました。講師の淺野先生から、標本の作り方などのお話を聞いた後、実際に甲虫と蝶の標本作成を体験しました。針を使った作業になるので、子ども達も真剣でした！淺野先生の丁寧な指導のもと、自分だけの標本が完成！質問コーナーでは質問待ちの列ができるほど、とても熱心に取り組んでいました。ここから将来の昆虫博士が誕生することを楽しみにしています！

（左）京都大学　地球環境学堂
資源循環学廊　准教授
淺野悟史先生

淺野先生は小さいころから昆虫が大好きで、現在は子ども達への環境教育にも熱心に取り組まれています。

※本イベントはきょうと地域創生府民会議協賛事業です

継承

生きものマップの活用

共催イベント

さすてな自然観察会 ～生きものマップを作ろう！～

当センターにて制作した生きものマップを、5月にさすてな京都での観察会にて使用しました。地図を手描きした後、ビオトープにてみんなで協力しながら生きものを探し、見つけた生きものの名前をマップに書き込んでいきます。観察会の後は、当センターから記録を残す大切さについてお話ししました。

さすてな京都のビオトープは自然共生サイトに認定されています。生きもの好きのスタッフさんによる解説に大盛り上がり！

解説を聞きながら生きものの
名前をマップに書き込む参加者ら

最後にみんなで報告会！わずか40分ほどで約40種の生きものを見つけました。

継承

担い手の育成

令和６年度に引き続き、生物多様性保全に係る若手人材を育成するため、府内各地域の保全活動に参加する研修会を実施しました。

第1回　大原野森林公園自然観察会　講師：森の案内人

昨年度の12月に担い手研修会で落ち葉かきを行った場所がどのような植生になっているかを知るため、5月に観察会をしました。防獣網の内側では一面に山野草が咲いており、日々の保全活動によって貴重植物が保護されていることを改めて認識する機会となりました。

防獣網の外側はシカの食害が激しく下層植生が寂しい様子でしたが、内側の色鮮やかな風景からはかつての大原野の春景色が思い浮かばれました。

ヤマブキソウ（黄）とイチリンソウ（白）
Hylomecon japonica　*Anemone nikoensis Maxim.*

ラショウモンカズラ
Mechania urticifolia

第2回　鴨川魚類調査体験

講師：京の川の恵みを活かす会　幹事　横田康平さん

魚類調査を題材に、モニタリングの意義とその調査手法について学ぶ研修会を実施しました。今回は鴨川にて、河川に生息する魚類の生息環境や魚種について教わり、基礎情報を収集することの重要性を学びました。

水中を観察する参加者ら

当日確認されたアユ
Plecoglossus altivelis

当日は12人の方にご参加いただきました。瀬・淵・岸際の各環境に生息する魚種を記録しました。わからない魚種については、その都度熱心に講師の方に質問する姿が印象的でした！

継承

京都府立植物園との協働

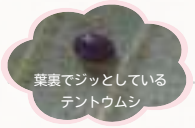
サイエンスレクチャー

京都府立植物園では毎月、専門家によるサイエンスレクチャーを開催しています。令和6年度から当センターも共催に参画し、令和7年5月には上田昇平先生による「植物とアリとカイガラムシ」、9月には高倉耕一先生による「牧野富太郎が見た“ふつうの草”は今どこに?」を開催しました。

テントウムシ観察会

テントウムシの生態を解説する
櫻谷先生

櫻谷保之先生を講師にお招きし、植物園にて7月に夏のテントウムシを探す観察会を実施しました。春によく見るテントウムシですが、実は夏にも観察することができます。みんなで根気よく探し…「あ！いた！」葉裏で涼む姿を見つけることができました。

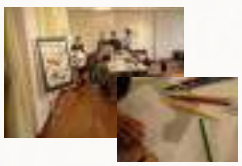


葉裏でジッとしている
テントウムシ

環境を学ぼう！自由研究サポート2025

※本イベントはきょうと地域創生府民会議協賛事業です

8月に「環境を学ぼう！自由研究サポート2025」を開催しました。「昆虫なんでも相談会」「竹からつくるキッチンツール」の２つのプログラムに、約30名の方にお越しいただき、盛況な会になりました！



「昆虫なんでも相談会」
講師：森　豊彦さん（人と自然の共生ネット　会長）
日本と海外の昆虫標本やポスターの展示と、昆虫ぬり絵をご用意いただきました。虫好きの子どもたちが集まり、昆虫豆知識を披露しながら次々にぬり絵を完成させました！

「竹からつくるキッチンツール
～木津川市の放置竹林を使ったワークショップ～」
講師：三瀬みゆきさん（京都工芸繊維大学大学院デザイン専攻）
放置竹林に関するお話を聞き、モウソウチクを使って、お箸やキッチントングを作りました。竹を切ったあとは、やすりをかけてつるつるに仕上げました！

「きょうと生物多様性パートナーシップ協定」

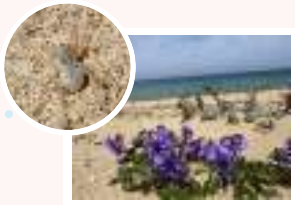
締結状況・活動報告

（公財）日新電機グループ社会貢献基金

「琴引浜の鳴り砂を守る会」とともに保全活動を実施しました！

（公財）日新電機グループ社会貢献基金（第１号、令和５年10月協定締結）の社員やご家族の皆様と、４回目となる京丹後市「琴引浜」の保全活動を４月に実施しました。琴引浜の鳴り砂を守る会の皆様とともに、貴重な海浜生態系と美しい松並木の景観を守るため漂着ごみを回収しました。また、生物多様性コーナーを新たに設けたリニューアル後の「琴引浜鳴き砂文化館」で琴引浜の自然について学びました。

発砲スチロールゴミが散乱する海浜を清掃する参加者ら



希少なイソコモリグモとイソスミレを観察

株式会社 京都環境保全公社

観察会をご支援いただきました！

株式会社 京都環境保全公社（第2号、令和6年5月協定締結）からの支援金を活用して、6月に京都府立丹波自然運動公園にて「水辺の生きもの観察会」を開催しました。当日は雨が心配な曇り空でしたが、子どもたちは水に入るやいなや大はしゃぎ。最後は講師役の「NPO法人亀岡 人と自然のネットワーク」による投網に大きな歓声が上がりました。

投網の様子

京都中央信用金庫

鴨川の保全活動を実施しました！

京都中央信用金庫（第3号、令和7年1月協定締結）の社員の皆様と鴨川における外来植物「オオバナミズキンバイ」の駆除活動を実施しました。当日は小雨となりましたが、鴨川を美しくする会様を中心に、多くのボランティアの皆様のご参加をいただき、植物を根っこから取り除く根気のいる作業を丁寧に行い、過去最高の約1,290kgを駆除することができました。本活動へ支援金の一部も活用させていただいております。

鴨川での駆除活動の様子

株式会社ティー・エム・ティー

「きょうと生物多様性パートナーシップ協定（第４号）」を締結しました！

令和7年4月に、株式会社ティー・エム・ティーと協定を締結しました。本協定により、子どもを対象に自然観察会等を実施する保全団体の活動支援のほか、花背地域での特定外来生物オオハンゴンソウの駆除活動へのご支援をいただいております。

花背での駆除活動の様子

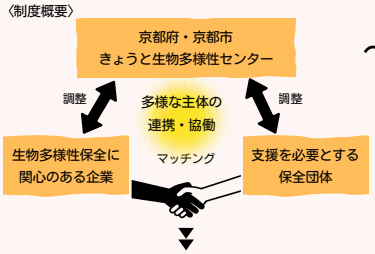
株式会社GSユアサ

「きょうと生物多様性パートナーシップ協定（第５号）」を締結しました！

令和7年8月に、株式会社GSユアサと協定を締結しました。本協定により、木津川市内で活動する「かせやまの森創造社（鹿背山の里地里山の保全活動）」及び京都市内で活動する「京の川の恵みを活かす会（淀川流域の河川におけるアユ等の保全活動）」へのご支援をいただく予定です。

協定締結式
（写真左から 松井孝治 京都市長、GSユアサ 阿部貴志社長、湯本貴和センター長、西脇隆俊 京都府知事）

〈制度概要〉



きょうと生物多様性パートナーシップ協定の締結

～「きょうと生物多様性パートナーシップ協定」とは～

本制度は、京都府域の生物多様性保全を推進するため、保全に取り組みたい企業と保全団体とのマッチングを図り、協定を結ぶことで、効果的かつ持続可能な生物多様性保全の取組を展開する制度です。本制度の詳細はこちらまで！→

テントウムシみわけ図鑑を配布しています！

きょうと生物多様性センターでは、ドングリとテントウムシをテーマに住民参加型の生物調査を実施しております。皆さまのご投稿をお待ちしております！

今後の予定

こちらのホームページから投稿できます！
また、みわけ図鑑もこちらからダウンロード可能です！

9月27日・28日	きょうと☆いきものフェス！2025
10月26日	植物の生命（いのち）と色～染めの手仕事を通じて植物の「いのち」を感じるプログラム～
10月29日	モスリウムワークショップ
11月9日	近畿「子どもの水辺」交流会 in 京都2025
12月6日	生物と文化を学ぶプログラム　テーマ：茶道と地衣類
11月（予定）	森里街川流域連携事業・森歩きイベント
1月以降（予定）	森里街川流域連携事業・自然の食味会

賛助会員の募集

当センターでは、個人や企業、保全団体などに幅広く参画いただき、力を合わせて京都の自然環境を守る取組を進めていきますので、ぜひ賛助会員としてご支援をお願いいたします。詳しくはこちら→

問合せ先

【本部オフィス】京都府立植物園　植物園会館内　〒606-0823 京都市左京区下鴨半木町
【交流オフィス】左京区役所２階⑭番窓口　〒606-8511 京都市左京区松ケ崎堂ノ上町7番地の２
開館日　毎週月曜日、水曜日、金曜日　午後１時～午後５時（祝日・休日・年末年始を除く）
電話番号：075-354-5275（本部）　075-744-1107（交流）
メール：contact@kyotobdc.jp
HP：https://www.pref.kyoto.jp/biodic/index.html

発行：きょうと生物多様性センター　令和7年9月

HP　メルマガ　X（旧Twitter）　Instagram